

口頭発表「学年で飼育した小学3～4年生の自由研究」

－ 3学期の研究発表会より－

中川美穂子

1 はじめに

全国のほとんどの小学校で動物飼育をしており、そのほとんどが飼育委員会方式による飼育活動をしているが、小学校6年の間にならざる全部の児童に体験させるとの試みが⁰⁹⁻⁰¹きて、平成15年の鳩貝等の全国調査では、約2割の小学校で、学年単位で飼育活動を行っていた。

しかし、飼育体験を基礎体験として、総合の授業に位置づけているのはまだ珍しいといえるが、この6年間、中学年の総合の学習に飼育体験を位置づけて「教育に活用している学校」の事例があるので、紹介したい。これらの小学校は、昨年1月の全国大会で発表された「学年での動物飼育体験が、こどもの動物への共感性及び向社会的行動の発達に与える影響の検討」の調査の学年飼育をしている対象校であった。この調査では、我々は、1年間学年飼育した子達は、飼育開始前と比べて「動物への共感度は上がるが、同時に人への優しさも有意に向上した」と発表した*1。

西東京市では19の市立小学校のうち12校で、4年あるいは3年・2年が飼育舎または校舎内で飼育活動をしているが、市立保谷第二小学校年と同柳沢小学校では、年間計画にそって総合の学習の授業に活用している（図1）。



図1

2 総合の年間計画

以下の計画に沿って、飼育活動を授業に活用する。

- ・ 1学期 飼育導入授業 獣医師支援
その後継続飼育
- ・ 2学期 獣医師への質問会 作文・絵・
課題研究・学芸会に活用等
- ・ 3学期 引継ぎ集会・時期担当学年に
伝える。

なお、休日の世話は、子ども達に「命には休みがない」と伝えるために、飼育担当学年の保護者がわが子と一緒に担当している。



図2

調べたきっかけ
毎日、イエローとブラットがげりをしていた

09-04

土のせいなのか？
にわとりが土を食べても安全なのか？

図 3

3 3学期の引継ぎ集会に見られる研究発表

一年間、1週間交代で飼育活動を続けた子どもたちは、3学期に次期の飼育学年に「引き継ぐための集会」で、自分たちの考えを発表する。まず動物個体の性格と抱き方扱い方など飼育に関わる事柄の引き継ぎ、自分たちが溜めてきた疑問に関しての研究発表などを行う。保谷第二小学校では、夫々の課題を、4年生の各クラスで担当して発表していた。

4 子ども達の意欲向上と動機付け

学校で伝統的に飼育されてきたウサギ（哺乳類）とチャボ（鳥類）は、人を見つめる丸い目を持ち、かつ毛がホワホワした動物で、見ただけで人を癒す力があるため、小さな子ども達が惹かれる対象である。子どもにとっては、対象に触ってこそ下記のように「意欲」に繋がることが見られている。

心地よい接触体験—>関心が生まれる—>関心があればしっかり世話に関われる—>動物に関心を持ちながら世話するうちに、動物になつかれてかわいくなる—>愛情をもって、動物をよく観察し、認知能力が向上し、動物と一緒に協力する友人の気持ちをも考えるようになる。

その結果、汚い糞尿の世話も責任感をもって行うなど、思いやりだけでなく、良い効果が子ども達に現れる。また、動物に好かれることで、自分への肯定感・自尊感情をもつことができ、自分に自信ができるので、友人との関係も改善され

ることも見られている。

また国際調査では、日本の高校生は生物の知識が不足していることが判明しているが、小さい時に人と同じ種類の哺乳類のほか、鳥類、そして爬虫類としてのカメなどとの、愛情を培いながらの交流は、将来の生物教育の基礎となると考えられる。現在の学生の力不足は、身近にそのような動物がなく、バーチャルでの飼育がはやる世相を反映していると推測される。この課題を解決するためにも、動物を飼育する子育て家庭が少なくなってきた現在、ことさらに学校の飼育を大事にして、最大限教育に活用すべきと考える。



図 4

図 4 は、1学期の飼育導入授業の最後に、子ども達の質問を受けている様子だが、獣医師と保護者の支援を受けた心地良い接触体験（動物を抱く）の後では、子ども達は、知れば知るほど疑問が湧く状態になり、質問が途切れることはない。これが、抱かずに動物の説明だけの授業の場合は、子ども達は「ウサギの目はなぜ赤い？」「どうして耳が長い」などの観念的な質問で終わる傾向がある。膝に動物を抱いて身近に観察した後では、「チャボの目はどうして（瞳孔が）大きくなったり小さくなったりするの？」「どうしてふわふわしているの？」などと具体的な質問を出し、話しは深く広がっていく。

5 獣医師の学校の飼育支援

西東京市では、平成3年から公立小学

校の飼育に関して、市が地域獣医師会員を学校に派遣し支援している。このような授業は6, 7年前から広がってきているが、この授業の目的と方向性は、担任が決めて依頼することが大事である。

子どもたちの質問に、獣医師は答えるが、獣医師は、専門的な立場から、あまりに詳しく説明する傾向がある。担任が事前に「どの程度の答えが必要か」を伝える必要があるだろう。

結果として「子ども達の理科的な興味とともに、弱い小さい動物への慈しみの心が生まれるよう」に話すことが望まれる。

なお、西東京市立小学校を支援している獣医師たちは、社団法人東京都獣医師会の会員で、北多摩支部西東京地区に動物病院を持つ院長たちである。

獣医師とは、当初は軍馬のため、その後は国民の安全な食肉の生産の確保と、衛生的な生活の確保のために設けられた、動物に関して唯一の国家資格である。一般に知られているペットの診療は、国民の生活の質の向上・確保のために必要で、近年認められてきている業務である。

ペット診療の他の業務を図5に示すが、公衆衛生の専門家として有用なので、活用されたい。

獣医師・ペット診療以外の仕事

- 基礎医学: 微生物 病理学 伝染病 実験動物学
人獣共通感染症 研究者
- 家畜衛生: 家畜の病気 (鳥インフルエンザ・BSE)
畜産の管理と支援(食料確保) 農林水産省
- 公衆衛生・環境衛生: 食品衛生: 食中毒(サルモネラ)
食堂の営業許認可 衛生検査 厚労省
- 生態学: 保護 動物愛護 野生動物 厚労省
世界遺産: 09-06 農省・林野庁
- 薬学 : 開発: 薬理学 実験動物 製薬会社
- 解剖・法医学: 人の死因の解明

**** 獣医師は動物に関して唯一の国家資格 ****

図 5

6 おわりに

生きた生物との遊びの体験は、後の生物教育や人格形成の基礎に多大な影響を与えると見えるが、それには飼育導入授業と継続飼育が重要である。その授業の雛形・話のポイントを以下に掲載するので、ご参考になれば幸いである。

(全国学校飼育動物獣医師連絡協議会

西東京市学校獣医師)

* 1) 2007 中島等 学年での動物飼育体験が、こどもの動物への共感性及び向社会的行動の発達に与える影響の検討 「動物飼育と教育vol.6」



